

九州大学新聞

<https://hdl.handle.net/2324/1520294>

出版情報：九州大学新聞. 98, 1933-11-20. 九大法文会
バージョン：
権利関係：



我南洋群島

金平亮三

南洋の語が聞く用ひられる様は、明治二十一年三月東京府下設置所になつたのは蓋し志賀重昂氏が、會が九十一のスクーナーに船を利得田口吉吉氏が、南洋に触れて初めて南洋の語を、マリナ、カロリン群島を巡り、その群島を合したもとで、日本に歸る。この群島は、島民の性質から見て、最も多くは、南洋の本體である。日本は、輸出する事は、日本へ向けてある。しかし、路筋に沿つて、最初に開拓せられたのが、南洋群島である。これが、南洋の本體である。日本は、輸出する事は、日本へ向けてある。しかし、路筋に沿つて、最初に開拓せられたのが、南洋群島である。これが、南洋の本體である。

（以上は三義製紙株式會社中島英彦君（東京レガシヨン会）の講演の筆跡が、常夏の理想郷と題して記載されている。）

内定してゐるものには、

◆ 應用化學科

鶴見忠夫君（岩城）

江澤謹彦君（鎌山）

山崎忠君（鎌山）

森原晴郎君（鎌山）

以上は三義製紙株式會社中島英彦君（東京レガシヨン会）の講演の筆跡が、常夏の理想郷と題して記載されている。

内定してゐるものには、

◆ 應用化學科

鶴見忠夫君（岩城）

江澤謹彦君（鎌山）

山崎忠君（鎌山

